

平成 26 年度地域医療・介護連携推進事業 一関コミュニティ FM (FM あすも) 番組
放送日：平成 26 年 9 月 24 日 (水) 17:20~17:30 (塩竈一常 GET KING!!)
(再放送：9 月 28 日 (日) 9:10~9:20 REFRESH!!)

「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」

第 6 回放送 一関在宅緩和支援ネットワーク (アイザック I Z A K) 佐藤隆次 会長

(聞き手：FM あすも 塩竈一常)

塩竈 一関市では、高齢化が進む中、住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、医療から介護への切れ目ないサービスを目指しています。このコーナーでは、医療機関や介護施設それぞれの持たれている役割、利用方法を医療・介護・福祉の関係者とそして私たち市民が、ともに理解、協力することを目的に一関市健康づくり課の提供でお送りします。

塩竈 さて、今日お話しを伺いますのは、一関在宅緩和支援ネットワーク I Z A K というグループがあるんですが、その会長も務めていらっしゃる、さらに一関病院の理事長兼病院長の佐藤隆次先生に様々なお話しを伺いました。

塩竈 「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」のコーナーです。今日は、スタジオに特定医療法人博愛会一関病院理事長兼病院長、さらに一関在宅緩和支援ネットワーク I Z A K の会長でもいらっしゃいます佐藤隆次先生にお越しいただきました。佐藤先生、よろしくお願います。

佐藤 よろしくお願いたします。

塩竈 隆次先生には、スタジオによくお越しいただきまして、リレー・フォー・ライフ・ジャパンいわての取り組みについていろいろお話しを伺ったりします。今日はこれ収録なんですけれども、収録後に、いよいよこのリレー・フォー・ライフ・ジャパンいわての今年のイベントがありまして、今放送されている頃にはですね、終わってところなんですけどね。

佐藤 そうですね。

塩竈 先生、このリレー・フォー・ライフ・ジャパンいわてで取り組まれたきっかけっていうところから、今日はちょっと聞いていきましょうか。

佐藤 取り組んだきっかけってというのは、自分が関わっていたがん患者さんと病院では診ることが多いんですけれども、でも、やっぱり生活していく中で、どうやってその患者さんを支えていくことができるのかなって考えて、でも何もできないでいた自分がいた時に、芦屋(兵庫県)で 2007 年にやられたリレー・フォー・ライフの映像を観て、これだと、自分がやらなきゃならないのは、こういうことなんだというのを気づかされて、実現するまで数年かかりましたけれど。

塩竈 多くの皆さんの支えというのがあるって、この一関の地でもね、もう恒例のイベントと言いますが、皆に認知されるほど、多くの皆さんに支えていただいているイベントです。参加されている方にお話しを聞いたりするんですけれども、何か勇気を分けてもらったりとか、それから次に向けてね、私もこう頑張っていくっていうその一歩を踏み出すことができたなんていうね、そういった一言をこういただけると、病気の治療っていうところをひとりだけではなくって誰かこう仲間がいるんだなあというところと、それをこう実感するってのはすごく大事ななんだなあっていうのを感じるんですね。

佐藤 まったく、そのとおりですよ。仲間がいる、ひとりじゃないんだって思えばいいの

かなって思っています。

塩竈 様々なその医療を進めていくに当たって、そういった先生とそれから患者さん自身、いろいろ手を組んで病気に立ち向かっていくというのが、すごく大事だになっていうのを先生とお会いするたびにいろいろ教えていただくような感じがいたします。先生は一関病院の理事長兼病院長でいらっしゃるんですけども、先生は、専門はどういった分野の先生になるんでしょうか

佐藤 緩和医療科として活動していますけど、緩和ケア、緩和医療っていうのが最近よく出てくると思うんですけども、その人の全体を診るといって、その人の生活を支える、そういった医療と考えています。

塩竈 そうなんですか。緩和医療、よく聞きますよね。一関病院にもありますし、それから県立磐井病院にも緩和医療科という、この緩和医療科という科自体は、結構昔からずっとあるものなんですか。

佐藤 古くはあるんですけど、東北の方に根付き始めたのは、最近ですかね。

塩竈 こういった緩和医療に携わっている皆さん、それから支援されている方々というのが、ネットワークというのを組みましてIZAKというネットワークを構築しているということで、その会長でもあるのが、佐藤先生ということですね。

佐藤 言い出しっぺだったというのがあるんですけど。

塩竈 まずは、その一関在宅緩和支援ネットワーク、こういった感じのネットワークなのかご紹介からお願いいたします。

佐藤 私、一関に来たのが平成 17 年だったんですけど、何とか緩和医療について地域のお手伝いできないかっていう発想から始まって、同

業の先生方とかいろいろな人たちに声を掛けて、平成 19 年の 3 月に今の一関在宅緩和支援ネットワークを最初に立ち上げたというか、そういった経緯で、まあ 7 年経ちますね、それから。

塩竈 関わっていらっしゃるのはこの一関地域の医療関係の皆さんと、訪問介護ステーション、調剤薬局、また介護支援をされている事業所さん、それから保健行政課、いろんな皆さんでこれが構築されているということですね。

佐藤 そうですね。

塩竈 在宅緩和、在宅緩和ケアとかね、こういった言葉もよく聞くんですけども、在宅緩和ケアというのは一体どういうものなのか、ここから、では教えて下さい。

佐藤 緩和ケアっていうそのものが、パリアティブケアとか、語源をたどるとラテン語になるんだそうですけども、実は、雨とか寒さとか露から身体を守ってくれるものが最初の語源っていうか、身体を要するに暖かく包んでくれるものっていうのが緩和ケアの語源になっていると聞きます。

塩竈 そうなんですか。寒さの時に、こう毛布を掛けてもらうとか、そういった感じの何か気持ちがかう緩やかになってくるような。字もこう緩やかっていうのと、それから和むっていうので緩和ですもんね。これが医療のところに活かされていくと、これが在宅緩和ケアなんていう言葉が出てくるんですね。

佐藤 在宅緩和ケアっていうのは、本来、どの場面でもというか、その病院であっても、緩和ケア病棟、ホスピスとか言うんですけども、あと在宅、施設そういった所で同じく質の高いケアを提供しましょうというのが本来の考え方なんですけれども、在宅と付けたのは、家に帰って最後の時を過ごしたいなあとか、家族さんが家で過ごさせてあげたいなあっていう時に、それをお手伝いできればなあということで在宅緩和ケアという名前を付けました。

塩竈 なるほど。これをこう行っていくには、もちろん医療関係の皆さんのそういった技術っていうのも必要ですし、また、看護される側の皆さんの取り組みがあるかと思うんですけれども、緩和医療っていうのは、例えば病気だとね、その痛みがあつたりとか、こういったものっていうのを柔らかくしてあげると言いますか。

佐藤 医者だけではできるものではないし、一つの職種でできるものではなくって、いろんな職種が組み合わさって、スクラムを組んでこそ初めて成り立つものだと思っていますし、本当に家で過ごされてるその表情とか見ると、すごく良いなあって思えるところが、まあまあありますしね、医者でない職種の方、看護師さんとか、入浴サービスとか、お薬の説明に行く人たち、薬剤師さんですね、そういう人たちにも、また特別の笑顔を見せてくれると聞いております。

塩竈 地域でこう連携してそういったネットワークを作っていく、これが一関だけではなく、いろんなところで取り組まれているところですが、特にこの一関では、この地域連携はどういった特徴があるんでしょうか。

佐藤 リレー・フォー・ライフでもそうなんですけれども、行政の方々も一緒にやってくれてるっていうのもありますね。そういうところは、すごくありがたく思っています。

塩竈 先生、緩和医療を長くされている先生なんですけれども、その医療自体なんですけどね、例えば、がんの患者さんであつたりとか、それ以外の病気もいろいろあるかと思うんですが、どのような医療っていうのが施されていくのが具体的にちょっといろいろと教えていただいてもいいですか

佐藤 基本的には緩和ケアの場合は、例えば、がんを持っている患者さんいるんですけれども、がんを治すのも医学ですし、がんを持って生活しているその人を支えるっていうのが、緩和ケアの基本的な考えなので、とにかくその人がそ

の人らしく暮らしが継続できるような形で支えていくということになります。

塩竈 なるほど。あのパッとその医療という言葉がついて聞いていると、どのような薬を与えるのかなとか、どのように休んでいただくのかなというところばかり目が行きがちなんですけれども、そこのベースになるのはやっぱりそれぞれの生活であつたりとか、家庭の環境であつたりとかいろいろあるかと思しますので、そこも含めていろいろトータルで診ていくのが、この緩和医療の大事なところなんです。

佐藤 とにかくにも、身体症状は取らなきゃいけない、例えばもう痛みがあればその人でなくなっちゃいますので、痛みとか、身体的な痛みとか、心のほうの痛みとか、そういったのが取れるような関わり方をしていくと、その上で生活を支えるっていうか。

塩竈 病院でその医療が施される場合もありますし、今お話しありました、在宅であればなおさら家庭の皆さんと、そういった繋がりがっていうのも、とても大事になってくるってお話がありましたけれども、どうでしょう、その病院での緩和ケアとそれから在宅での緩和ケアっていう、それぞれ特徴っていうのがいろいろあるかと思うんですけど、特に在宅で診てらっしゃるところをこれまでご覧になって、先生どんなふうにお感じになっておりますか。

佐藤 本当に病院ですと、私のところは一般病院なんで、本当に味気のない病室で毎日単調な形で時を過ごしていくっていう印象があるんですけど、在宅に行つて伺うとですね、根本的に違うのは、医者じゃないんですね。客人なんです。私がゲストなんです。そんな中でホストの患者さんが「お茶っこ飲んでいかいん」とか、そういったので、全く立場が違うのと、家の様子を見ると、その人の生活、歴史、その人の今まで生きてきた、そういった様子が伺われますね。そういう意味では、すごく我々にとっては、もう新鮮っていうか。

塩竈 その患者さんご自身もその自分らしいその生き方であったりとかっていうところを、すごく家庭の中でも実感されていて、病気に立ち向かっていく、先ほどそのリレー・フォー・ライフ・ジャパンの話もありましたけれども、ひとりではなくって家族、それからお家にやって来てくれるお先生も含めてですけど、地域と一緒に頑張ってるんだっていうところ、そういった気持ちがより高まってくるんでしょうね。

佐藤 やっぱり地域でというところが、すごく大事なところかなと。

塩竈 一関在宅緩和支援ネットワーク I Z A K、ここが中心になりまして、こういった皆さんが、家庭でそのような医療を受けたりとか、それからちょっと痛みをこう和らげたりとか、いろんなそういった病気に立ち向かうっていうところをこう支援されているっていうことで、現在では医療関係者だけではなく、様々な機関等がお互いに協力しながら活動しあっているっていうことです。こういうふうにはラジオでこの緩和医療の現状っていうのを皆さんに知っていただくっていうのもそうですけれども、先生は各地にいろいろこう出かけまして、講演会、シンポジウムとかいろいろこうされていますね。

佐藤 そうですね。出前勉強会とかもやらせてもらっています。

塩竈 いらっしゃる皆さんってというのは、まさにこれからね、その介護であったりとか、それから今は違うけれども、ご家族がそういった病気になった場合にはっていう勉強される方もいらっしゃるでしょうし、まさに今、当事者って方もいらっしゃるでしょうね。

佐藤 本当にそうだと思います。看取る側で、そのうち、また看取られる側になるっていうのもありますしね。

塩竈 いろいろこれまでの先生もその治療っていう最前線でお仕事をされてきまして、その中で、その患者さんとの向き合っていく姿で

あったりとか、いろんなもの、また、その地域全体のその医療っていうのを豊かにしていくっていうお仕事を今されているってのが、こちらに伝わってまいりました。これから先のその普及活動ですとか、いろんなもの取り組まれるとのことなんですけれども、こういった出前勉強会ですとか、こういったのは先生にお願いしましたら引き受けていただけるものなんでしょうか。

佐藤 いつでも言っていただければ出ていきますんで。本当にいろんな職種がタックを組んでいるっていうか、スクラムを組んでいますけれども、我々に恵まれているのは、行政の理解があるってことがありますね。本当に感謝しています。顔の見える関係ということで今までやってきましたけど、今度は、どこそこの誰それさん、この人の病気はこうなんで、家族相手がこんなだからっていうことで、互いに組むのが顔の見える関係から相手が分かる関係に、そういったところにき始めているなあというのが、今感じています。

塩竈 このコーナーの中でも、いろんな形でその医療ですとか、その地域、引いては地域づくりに繋がっていくんでしょうけれども、いろいろここに繋がっていく私たち自身もそこに関わっていくっていうのを番組でもお知らせしているんですが、こういった講演会、それから出前勉強会も含めて、いろいろこの学ぶ機会っていうのを多く設けて、私たち自身がこの街を豊かにしていくために関わっているんだっていうところをあらためて実感してもらえたらいいなと思います。一関在宅緩和支援ネットワーク事務局は、磐井病院地域医療福祉連携室、こちらの中にあるということです。問い合わせの番号は23-3452番となっています。今日はスタジオに特定医療法人博愛会一関病院理事長兼病院長、さらに一関在宅緩和支援ネットワーク I Z A K の会長でもいらっしゃいます、佐藤隆次先生にお越しいただきました。佐藤先生、ありがとうございました。

佐藤 今日はどうもありがとうございました。

塩竈 一関市では高齢化が進んでいます。住み慣れた地域で安心して暮らせるように、医療から介護への切れ目ないサービスを今も先生の話しからありましたけれど、医療機関、介護機関だけではなくて行政側もそのサービスを充実させるためにいろいろな取り組みというものを実は率先して行っているんですね。このコーナーでは、さまざまな医療機関、また、介護施設が持っている役割、それから今日先生が取り組まれている一関在宅緩和支援ネットワーク、こういったグループでの取り組み、また、利用方法などを私たちがともに理解協力していくこれを目的にしてお送りしています。地域医療体制の充実のため、私たちも積極的にこのような取り組みに関わっていきましょう。「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」このコーナーは、一関市健康づくり課の提供でお送りしました。